

六浦

左阿弥作

| | | | |
|----|-----|------|----|
| 季は | 地は | 後 | 前 |
| シテ | ワキ | | |
| シテ | 都の僧 | | |
| 九月 | 楓の精 | 前に同じ | 里女 |
| 武藏 | | | |

「思ひやるさへ遙かなる。く。東の旅に出でうよ。

詞

「是は洛陽の辺りより出でたる僧にて候。我いまだ東国を見ず候ふ程に。此秋思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ候。

道行
「逢坂の。関の杉村過ぎがてに。く。ゆくへも遠き湖の。舟路を渡り山を越え。幾夜なくの草枕。明け行く空も星月夜。鎌倉山を越え過ぎて。六浦の里に着きにけり。く。

「千里の行も一步より起るとかや。はるぐと思ひ候へども。日を重ねて急ぎ候ふ程に。是は、や相模の国六浦の里に着きて候。此渡りをして安房の清澄へ参らうするにて候。又あれに由ありげなる寺の候ふを人に問へば。六浦の称名寺とかや申し候ふ程に。立ちより一見せばやと思ひ候。なふく御覧候へ山々の紅葉今を盛と見えて。さながら錦をさらせる如くにて候。都にもかやうの紅葉

の候ふべきか。また是なる本堂の庭に楓の候ふが。
木立余の木に勝れ。唯夏木立の如くにて。一葉も
紅葉せず候。如何さま謂のなき事は候ふまじ。人
來りて候はゞ尋ねばやと思ひ候。

シテ詞
「なふく御僧は何事を仰せ候ふぞ。

ワキ詞
「さん候是は都より始めて此所一見の者にて候ふが。
山々の紅葉今を盛と見えて候ふに。是なる楓の一
葉も紅葉せず候ふ程に。不審をなし候。

シテ
「げによく御覽じとがめて候。いにしへ鎌倉の中納
言為相の卿と申しゝ人。紅葉を見んとて此所に来
り給ひし時。山々の紅葉いまだなりしに。此木一
本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば。為相の
卿とりあへず。如何にして此一本に時雨れけん。
山にさきだつ庭のもみぢ葉と詠じ給ひしより。今
に紅葉をとゞめて候。

ワキ
「おもしろの御詠歌やな。われ数ならぬ身なれど

も。手向の為めにかくばかり。旧りはつる此一本の跡を見て。袖のしぐれぞ山にさきだつ。

シテ詞
「あら有難の御手向やな。いよく此木の面目にてこそ候へ。

ワキ
「さてく先に為相の卿の御詠歌より。今に紅葉をとゞめたる。謂は如何なる事やらん。

シテ
「實に御不審は御理り。さきの詠歌に預かりし時。此木心に思ふやう。かかる東の山里の。人も通は

ぬ古寺の庭に。われ先だちて紅葉せずは。いかで妙なる御詠歌にも預かるべき。功成り名遂げて身退くは。是れ天の道なりといふ古き言葉を深く信じ。今に紅葉をとゞめつつ。唯常盤木の如くなり。

ワキ
「是は不思議の御事かな。此木の心をかほどまで。しろしめしたる御身はさて。如何なる人にてましますぞ。

シテ
「今は何をか包むべき。私は此木の精なるが。御

僧たつとくまします故に。唯今顕はれ來りたり。

今宵はこゝに旅居して。夜もすがら御法を説き給はゞ。重ねて姿を見え申さんと。

地
「夕べの空も冷ましく。此古寺の庭の面。霧の籬の露深き。千草の花をかき分けて。ゆくへも知らずなりにけり。／＼。(申入)

ワキ歌
「所から。心にかなふ称名の。／＼。御法の声も松風も。はや更け過ぐる秋の夜の。月澄み渡る庭の

面。寐られんものかおもしろや。／＼。

後ジテ
「あら有難の御弔ひやな。妙なる值遇の縁にひかれて。二度こゝに來りたり。夢ばしさまし給ふなよ。

ワキ
「不思議やな月澄みわたる庭の面に。有りつる女人とおぼしくて。影の如くに見え給ふぞや。草木国土悉皆成仏の。此妙文を疑ひ給はで。なほ／＼昔を語り給へ。

地 「花葉さまぐの其姿を。心なしとは誰かいふ。

シテサシ 「夫れ青陽の春の初め。

地 「色香たへなる梅が枝の。かつ咲きそめて諸人の。心や春になりぬらん。

シテ 「又は桜の花盛。

地 「唯雲とのみ三吉野の。千本の花にしくはなし。

クセ 「月日経て。移れば変はる詠めかな。桜は散りし庭の面に。咲きつゞく卯の花の。垣根や雪にまがふ

らん。時移り夏暮れ。秋も半になりぬれば。空

定めなき村時雨。きのふは薄きもみぢ葉も。露しぐれ洩る山は。下葉残らぬ色とかや。

シテ 「さるにても。東の奥の山里に。

地 「あからさまなる都人の。あはれも深き言の葉の。

露の情にひかれつゝ。姿をまみえ数々に。言葉をかはす值遇の縁。深き御法を授けつゝ。仏果を得しめ給へや。

シテ
「更け行く月の夜遊をなし。

地
「色なき袖をやかへさまし。 (序の舞)

シテ
「秋の夜の。千夜を一夜に重ねても。

地
「言葉のこりて鳥や鳴かまし。

シテ
「八声の鳥も数々に。

地
「八声の鳥も数々に。鐘も聞ゆる。

シテ
「明方の空の。

地
「所は六浦の浦風山風。吹きしをり吹きしをり。散

るもみぢ葉の月に照り添ひて。唐紅の庭の面。明
けなば恥かし。暇申して帰る山路に。行くかと思
へば木の間の月の。く。かげろふ姿となりにけ
り。